

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

TAKE NO NAKA NO

# 嶽ノ中野B遺跡

農免農道整備事業（能野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査

1995年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

## 序 文

大隅諸島の一つ種子島は、本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた東南約 40 kmの海上にあり、四面が海に囲まれ、底平な台地と数多くの小川があり、また黒潮の恵みによって照葉樹林が繁茂した温暖な環境にあることから、島内各地から古代の遺跡が数多く発見されています。

この嶽ノ中野B遺跡は鹿児島県農政部農地建設課が能野地区内に農免農道整備事業を計画したことにより、西之表市教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育庁文化課及び同県立埋蔵文化財センターの協力を得て、発掘調査を実施したものであります。

本発掘調査は、狭小な遺跡で2週間余りの短期間で行ったものですが、「上能野式土器」と呼ばれる本島特有の単独土器型式の出土遺跡であり、今後、この土器型式の文化解明の一助となる成果を得ました。

この遺跡に立つと、眼下に東シナ海が望まれ、それによって形成された新期砂丘で遺跡は終焉を迎えていることが判明し、自然の過酷さを知る興味深い遺跡であることも理解できます。

本報告書が学術的文献として活用されることはもとより、市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、発掘調査に際して全面的に御協力いただいた鹿児島県教育庁文化課及び県立埋蔵文化財センターをはじめ、能野地区の関係者、さらに貴重なご助言等をいただいた諸先生方に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月31日

鹿児島県西之表市教育委員会 教育長 鎌田 一 正

# 報 告 書 抄 録

フリガナ	タケノナカノBイセキ					
書名	畿ノ中野B遺跡					
副書名	農免農道整備事業（能野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	(8)					
編著者名	新東 晃一 大久保浩二					
編集機関	西之表市教育委員会（種子島開発総合センター）					
所在地	〒891-31 西之表市西之表7585					
発行年月日	1995.3					
フリガナ	タケノナカノBイセキ					
所収遺跡	畿ノ中野B遺跡					
フリガナ	カゴシマケン ニシノオモテシ スミヨシ ヨキノ					
所在地	鹿児島県西之表市住吉能野					
調査期間	平成6年5月23日～6月7日					
調査面積	500㎡					
調査原因	農免農道整備事業（能野地区）					
出土遺物・遺構等	時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
		遺構無し	弥生時代～ 古墳時代	上能野式土器	約500点	包含層中の炭化物による年代測定値 1880±120 y.B.P
			平安時代	土師器	1個体	



獄ノ中野B遺跡位置図 (5万分の1)

## 例 言

- 1 本報告書は平成6年度に西之表市教育委員会が鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）の受託事業として実施した「農免農道整備事業（能野地区）」に伴う「嶽ノ中野B遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査の組織は、第Ⅰ章調査の経過の中に記した。
- 3 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部が提示した事業計画図面の数値に基づく。
- 4 地形・遺物の実測図、製図、写真撮影は新東と大久保がおこなった。
- 5 遺物番号は通し番号を付し、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 6 本報告書の執筆分担は下記の通りで、編集は新東がおこなった。

第Ⅰ章	調査の経過	新東
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	大久保
第Ⅲ章	調査の概要	新東・大久保
第Ⅳ章	発掘調査のまとめ	新東・大久保

# 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 発掘調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺の遺跡	3
第Ⅲ章 発掘調査の概要	
第1節 調査の概要	8
第2節 遺跡の層位	8
第3節 III a層の調査	12
第4節 出土遺物	12
第Ⅳ章 発掘調査のまとめ	25
補編 C <sup>14</sup> 年代測定結果報告	36

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2図 遺跡の範囲と周辺の地形	9
第3図 遺跡の地形と周辺の地形	10
第4図 嶽ノ中野B遺跡の断面図	11
第5図 出土遺物分布図	13
第6図 出土遺物分布図(接合状況)	14
第7図 出土遺物実測図(1)	15
第8図 出土遺物実測図(2)	16
第9図 出土遺物実測図(3)	17
第10図 出土遺物実測図(4)	18
第11図 出土遺物実測図(5)	19
第12図 出土遺物実測図(6)	20
第13図 出土遺物実測図(7)	21
第14図 上能野式土器実測図	22

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表(1)	6
第2表 周辺遺跡地名表(2)	7
第3表 嶽ノ中野B遺跡出土土器一覧表(1)	23
第4表 嶽ノ中野B遺跡出土土器一覧表(2)	24

## 図 版 目 次

図版1	26
図版2	27
図版3	28
図版4	29
図版5	30
図版6	31
図版7	32
図版8	33
図版9	34
図版10	35

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地建設課・熊本支庁土地改良課・以下農政部）は、能野地区内において農免農道整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化課（以下文化課）に照会した。これを受けて、県文化課と西之表市教育委員会、種子島開発総合センター（以下開発総合センター）は、平成3年4月に分布調査を実施した。その結果、事業区内に竊ノ中野B遺跡が存在することが判明した。

この分布調査結果をもとに、農政部、県文化課、開発総合センターで協議した結果、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため、緊急発掘調査を実施することとなった。

## 第 2 節 調査の組織

発掘調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て、西之表市教育委員会の調査主体で行った。調査の組織は下記の通りである。

事業主体	鹿児島県農政部（農地建設課・熊本支庁土地改良課）		
調査主体	西之表市教育委員会		
調査責任者	＃	教育長	鎌田 一正
調査企画者	＃	種子島開発総合センター	所長 鯨島 安豊
調査庶務担当	＃	＃	次長 下江 信吉
	＃	＃	主事 沖田純一郎
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		主任文化財主事 新東 晃一
	＃		文化財研究員 大久保浩二

尚、調査企画にあたっては、鹿児島県教育庁文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

## 第 3 節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成6年5月23日（月）から6月7日（火）の間に実施した。整理作業及び報告書作成作業は、発掘調査終了後、平成7年3月の間に実施した。以下、日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

- 5月23日（月） 現場着。作業員へのオリエンテーションの後、作業開始。重機による表土剥ぎ。10mグリッド設定。グリッドに沿ってL字のトレンチを設定。掘り下げ。
- 5月24日（火） トレンチ掘り下げ。砂層下の黒褐色土から上能野式土器の口縁部出土。出土状況写真撮影。
- 5月25日（水） レベル移動。A・B-3区Ⅲa層掘り下げ。土器小片を一括取り上げ。

- 5月26日(木) A・B-3区Ⅲa層掘り下げ。A・B-1・2区のⅡ層を剥ぎ、Ⅲ層上面検出。
- 5月27日(金) A・B-3区Ⅲa層遺物出土状況写真撮影。遺物取り上げ。B-4、C-3・4区Ⅲ層掘り下げ。
- 5月31日(火) A・B-4、C-3・4区Ⅲ層掘り下げ。包含層はほぼ完掘。
- 6月1日(水) A・B・C-4区Ⅲ層遺物出土状況写真撮影。遺物取り上げ。A・B-2区Ⅲ層遺物出土状況写真撮影。遺物取り上げ。
- 6月2日(木) A・B-3・4区側のグリッドに沿って、ミニトレンチ設定。旧地形の起伏により、Ⅲ層の落ち込を確認したため、掘り下げる。遺跡遠景の写真撮影。
- 6月3日(金) A・B-3・4区側Ⅳ層上面まで完掘。写真撮影。20cmコンタ実測。
- 6月6日(月) セクションベルト掘り下げ。遺物取り上げ。
- 6月7日(火) A・B・C-2区Ⅳ層上面まで完掘。写真撮影。20cmコンタ実測。南北方向の土層断面実測。作業終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

大隅諸島の一つ種子島は、本土最南端佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にある。面積は447km<sup>2</sup>、南北に54km、東西のもっとも幅広い部分で12km、最狭部で6kmと細長く、中くびれの形をしている。

地形は丘陵性の山地、海岸段丘有、河川付近の沖積低地から成り、最高部で282.3mと全体から見て低く平坦な島である。隣接の屋久島(約15km南西)が九州最高峰の宮之浦岳(1,935m)を擁する山岳地形であるのに対し、種子島の平坦さは非常に対象的である。

地質は、中部以北に古第三紀層の熊毛層群が基盤岩となっており、大きく褶曲した状態で広く分布し、海岸段丘がこの熊毛層群を侵食して発達している。種子島の海岸段丘は7～8段を認めることができるというが、その分布は西之表市の西岸及び東岸、中種子町のほぼ全城、南種子町の西半に見られ、種子島の地形の最大の特徴となっている。また西海岸には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。

嶽ノ中野B遺跡は、西之表市能野標高約80mの海岸段丘上に位置し、左右は浸食谷が八手状に入り込み、尾根状になっている。晴れた日には対岸の馬毛島はもとより、薩黄島・竹島、そして大隅半島から薩摩半島南端の開聞岳までも見渡すことができる、眺望の地である。

遺跡近くの海岸部一帯は砂丘が発達しているが、その砂丘上には昭和47年に河口貞徳氏等によって発掘された上能野貝塚がある。今回嶽ノ中野B遺跡から発掘された上能野式土器は、この上能野貝塚を標識遺跡とするものであり、口縁部を三角形に肥厚させ、鋭いヘラ状の工具で沈線文を描き、細い粘土紐を貼り付けるなどした変型土器である。やや上げ底の脚台を有するものも特徴である。上能野貝塚からはこの土器のほかに、貝輪や貝小珠などの貝製垂飾品や、鉄製の釣り針も出土している。

上能野式土器の分布は現在のところ種子島のみに限られるようであるが、島内からは西之表市現和田ノ脇遺跡、中種子町田島の輪之尾遺跡や増田島ノ峯遺跡、中種子町の広田遺跡などが発見されている。

### 第2節 遺跡の環境

このほか種子島の歴史的環境としては、これまで縄文時代早期前半からの遺跡は知られていなかったが、近年旧石器時代や縄文時代草創期にさかのぼる遺跡が相次いで発見されたのは記憶に新しい。まずは平成4年に発掘調査された南種子町の横峯遺跡がある。AT火山灰の下から2基の礫群が発見され、放射性炭素年代測定でほぼ3万年以前の年代が与えられている。次に、平成5年に調査された西之表市立山に所在する奥ノ仁田遺跡からは、縄文時代草創期の遺物・遺構が多量に発見された。出土土器の大半が、陸帯部に二枚貝の腹縁部を用いて加飾する陸帯文土器であるが、ほかに無文・指頭・ヘラ状工具・棒状工具などの施文具も確認されている。石

器も打製石鏃・磨製石鏃のほか、両刃直刃石斧・片刃直刃石斧・丸ノミ状石斧・磨製・石皿などが出土している。遺構は配石遺構が2基・集石が18基発見されている。縄文時代草創期の遺跡が確認されたのは、県本土以南の島では初めてであった。

以下西之表市に限って縄文～古墳時代を概観すると、縄文時代早期の遺跡としては、吉田式土器を出土した川脇遺跡、下剥峯タイプとして分類される只殻条痕と貝殻刺突の文様をもつ土器が出土した下剥峯遺跡などが知られている。また最近、種子島最北端の国上地区にある久保田遺跡から、押型文系の土器が発見され注目された。さらに寒ノ神式土器になると、島内各地から数多く出土している。前期の遺跡としては、曾畑式土器を良好に出土した本城遺跡が有名である。中期は国上太田遺跡で阿高式系と思われる土器が出土している。後期は指宿式・市来式などのほか、納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡が知られている。

弥生時代は、現和田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡などの埋葬遺跡のほか、下剥峯遺跡、田ノ脇遺跡、泉原遺跡、安納峯遺跡から、入来式系の中期の土器が出土している。後期の土器としては、先述の上能野遺跡出土の土器が、地域性の強い土器として分布している。

また種子島においては、現在のところ、古墳時代に属すると思われる埋葬施設や集落跡などは発見されていない。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡地名表(1)

	遺跡名	所在地	地形・時代	備考
1	本城	西之表市檜城松嵐	台地, 縄文(前・中・後), 歴史	「考古学雑誌」39巻, 市報(1) 県考古学会紀要2号, 昭和34・35年発掘調査
2	農林	西之表市檜城松嵐	台地, 縄文(早), 古墳, 古代	市埋文報(6)
3	小浜貝塚	西之表市国上中目	砂丘, 縄文(前), 古墳	
4	深川	西之表市住吉深川	台地, 縄文(早)	昭和59年9月発掘調査(市)
5	二本松	西之表市古田二本松	台地, 縄文(早・中)	「南種子町郷土誌」, 市埋文報(7)
6	赤木	西之表市現和庄司浦	台地, 縄文(早)	市埋文報(3), 昭和52年確認調査
7	下割峯	西之表市現和庄司浦	台地, 敷(早・中), 弥生(中)	市埋文報(3), 昭和52年発掘調査
8	太田Ⅱ	西之表市国上寺之門	台地, 縄文	市調査
9	浅川牧Ⅱ	西之表市現和浅川	台地, 敷(早・中)	県セクター埋文報(10), 昭和54年発掘調査
10	納曾	西之表市檜城納曾	台地, 縄文(後)	「鹿児島考古」第9号西之表納曾遺跡概要 「鹿児島考古」第12号, 昭和50年発掘調査
11	大花屋	西之表市上西大花屋	砂丘, 縄文(後)	「南種子町郷土誌」, 昭和52年8月確認調査
12	横峯	西之表市現和上之町	台地, 弥生	県埋文報(5), 昭和51年確認調査
13	田之脇	西之表市現和田之脇	砂丘, 弥生(後)	市報(1), 昭和41年発掘調査
14	上能野貝塚	西之表市住吉上能野	砂丘, 弥生(後)	「鹿児島考古」第7号上能野貝塚調査発掘 市報(2), 昭和47年発掘調査
15	本立	西之表市檜城本立	台地, 歴史	「中種子町郷土誌」
16	太田Ⅲ	西之表市国上太田	山地, 歴史	
17	内和	西之表市現和庄司浦	台地, 歴史	市埋文報(3), 昭和52年確認調査
18	住吉城跡	西之表市住吉望之町	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
19	新城跡	西之表市檜城中目	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
20	内城跡	西之表市檜城中目	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
21	坂ノ上城跡	西之表市檜城中目	丘陵, 歴史	県埋文報(43), 平成6年詳細分布調査
22	古城跡	西之表市檜城美浜	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
23	城	西之表市檜城城	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
24	黒山尻	西之表市檜城池田	丘陵, 歴史	県埋文報(43)
25	武部割所跡	西之表市現和武部	低地, 歴史	市指定文化財(史跡)
26	太田Ⅰ	西之表市国上寺之門	台地, 縄文	市調査
27	赤尾木城跡	西之表市檜城中目	丘陵, 歴史	県埋文報(43)市指定文化財(史跡)
28	能野焼窯跡	西之表市住吉上能野	丘陵, 歴史	市指定文化財(史跡)
29	俣江	西之表市住吉深川	台地, 縄文	
30	沖ヶ浜田北	西之表市伊蘭沖ヶ浜田	砂丘, 弥生	昭和40年2月発掘調査
31	野久尾城跡	西之表市上西池之久保	丘陵, 歴史	別称「石峰城」, 中世城跡跡, 県埋文報(43)
32	本立Ⅱ	西之表市檜城本立	台地, 縄文, 中世	
33	俣江	西之表市安納軍場	台地, 縄文(早)	市埋文報(5), 昭和59年確認調査
34	大平	西之表市安納大平	台地, 縄文(早)	
35	峯	西之表市安納峯御	台地, 弥生	
36	安納城跡	西之表市安納峯	丘陵, 歴史	県埋文報(43), 中世城跡跡
37	大四郎	西之表市現和庄司浦	台地, 縄文	市埋文報(3), 昭和52年確認調査
38	指辺	西之表市現和庄司浦	台地, 縄文(前)	市埋文報(5), 昭和50年確認調査
39	中之峯	西之表市現和上之町	台地, 縄文	県埋文報(5), 昭和51・59年確認調査
40	東方ノ平	西之表市現和上之町	台地, 弥生	

第2表 周辺遺跡地名表(2)

	遺跡名	所在地	地形・時代	備考
41	西 俣	西之表市現和西俣	台地, 縄文(Ⅱ・Ⅲ), 弥生	昭和54年発掘調査
42	道月ノ峯	西之表市現和武部	台地, 中世	
43	院 房	西之表市現和武部	山地, 中世	
44	武 部	西之表市現和武部	台地, 縄文(後)	
45	浅川牧Ⅰ	西之表市現和浅川	台地, 縄文(Ⅱ・Ⅲ)	県センター埋文報(10), 昭和54年発掘調査
46	歴史久田城跡	西之表市下西池野	丘陵, 歴史	県埋文報(43), 中世城館跡
47	古田城跡	西之表市古田村之町	丘陵, 歴史	県埋文報(43), 中世城館跡
48	仏ヶ峯	西之表市住吉下能野	台地, 奈良, 平安	
49	高 峯	西之表市住吉深川	台地, 縄文(Ⅱ・Ⅲ)	市埋文報(5), 昭和59年確認調査
50	花里崎Ⅰ	西之表市上西花里崎	海岸段丘, 縄文	
51	花里崎Ⅱ	西之表市上西花里崎	海岸段丘, 縄文	
52	伊ノ峯	西之表市上西伊ノ峯	台地, 縄文(前)	
53	池之久保Ⅰ	西之表市上西池之久保	台地, 縄文(前)	
54	池之久保Ⅱ	西之表市上西池之久保	台地, 縄文(前)	
55	泉 原	西之表市現和下之町	低地, 弥生	
56	直 助 峯	西之表市現和下之町	台地,	昭和63年確認調査
57	堤	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
58	下佐野和	西之表市現和武部	丘陵,	昭和63年確認調査
59	南佐野和	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
60	横 野 平	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
61	山道之平	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
62	池 之 迫	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
63	下池之迫	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
64	二 俣 野	西之表市現和武部	台地,	昭和63年確認調査
65	中 割	西之表市中割万波	台地, 弥生	昭和63年確認調査
66	権ノ木	西之表馬毛島権ノ木	砂丘, 弥生(後)	市埋文報, 昭和53年発掘調査
67	嶽ノ中野A	西之表市住吉上能野	台地, 古墳	平成3年分布調査
68	嶽ノ中野B	西之表市住吉上能野	台地, 古墳	平成3年分布調査, 平成6年発掘調査
69	奥ノ仁田	西之表市立山横松	台地, 縄文(草・早)	市埋文報(7), 平成5年発掘調査
70	九郎三工門	西之表市立山戸野	自然堤防	平成3年分布調査
71	日 守 A	西之表市安城川脇	台地, 縄文(早)	平成6年確認調査
72	日 守 B	西之表市安城川脇	台地, 縄文(早)	平成6年確認調査
73	日 守 C	西之表市安城川脇	台地, 縄文(早)	平成6年確認調査
74	塔 之 原	西之表市西之表塔之原	海岸段丘, 縄文, 中世	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
75	覆 迫	西之表市上西伊ノ峯	台地, 縄文	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
76	長 深 田	西之表市上西伊ノ峯	台地, 古墳	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
77	峰ノ園	西之表市上西伊ノ峯	台地, 縄文	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
78	大富田A	西之表市上西伊ノ峯	台地, 古墳	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
79	大富田B	西之表市上西伊ノ峯	台地, 古墳	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
80	深 田	西之表市上西横山	台地, 古墳	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
81	一ノ鳥居	西之表市息長野一ノ鳥居	砂丘, 縄文(後)	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
82	松 原	西之表市西之表美浜	砂丘, 縄文中世(室町)	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
83	池ノ窪	西之表市西之表池ノ窪	砂丘, 縄文(後)	平成4年サン・オーシャン・リゾート分布調査
84	寺之門	西之表市園上寺之門	低地, 縄文(早・後)	

## 第三章 調査の概要

### 第1節 調査の概要

発掘調査は、道路建設予定地内に10m×10mのグリッドを設定して行った。グリッドは、計画道路のほぼ南北方向を基準に、東—西方向にA区、B区、北—南方向に1～4区を設定した。

発掘調査は、A3区付近を試掘したところ、耕作土下に砂層（新期砂丘）が検出され、その下の暗黒褐色粘質土層に遺物包含層が存在することが判明した。そのため、A区の東側A3区、B3区列の北側にセクション用の壁を残し、全面調査を実施した。全面調査は、I層（表土）及びII層（新期砂丘層）は重機によって掘り下げ、III層以下は人力で掘り下げた。

発掘調査の結果、基盤層のIV層（明茶褐色粘質土層）の上部に形成されたIII層（黒褐色粘質土層）で、上部は若干腐植化しており、上層のIII a層（暗黒褐色土層）中に遺物包含層が存在していた。そして、この遺物包含層は、II層の砂層（新期砂丘）によって厚く覆われていることが判明した。その後、砂丘の高所は畑地形成のため削平され、耕作土（表土）が人為的に盛土されていることが判明した。

遺物包含層は、整理作業の結果、弥生時代から古墳時代に該当する時期の薩南諸島独特の土器型式で、しかもその遺物から単純層と想定される。さらに、遺物包含層の上面には新期砂丘が覆っており、新期砂丘の形成時期の問題など重要な課題を提供している。

### 第2節 遺跡の層位

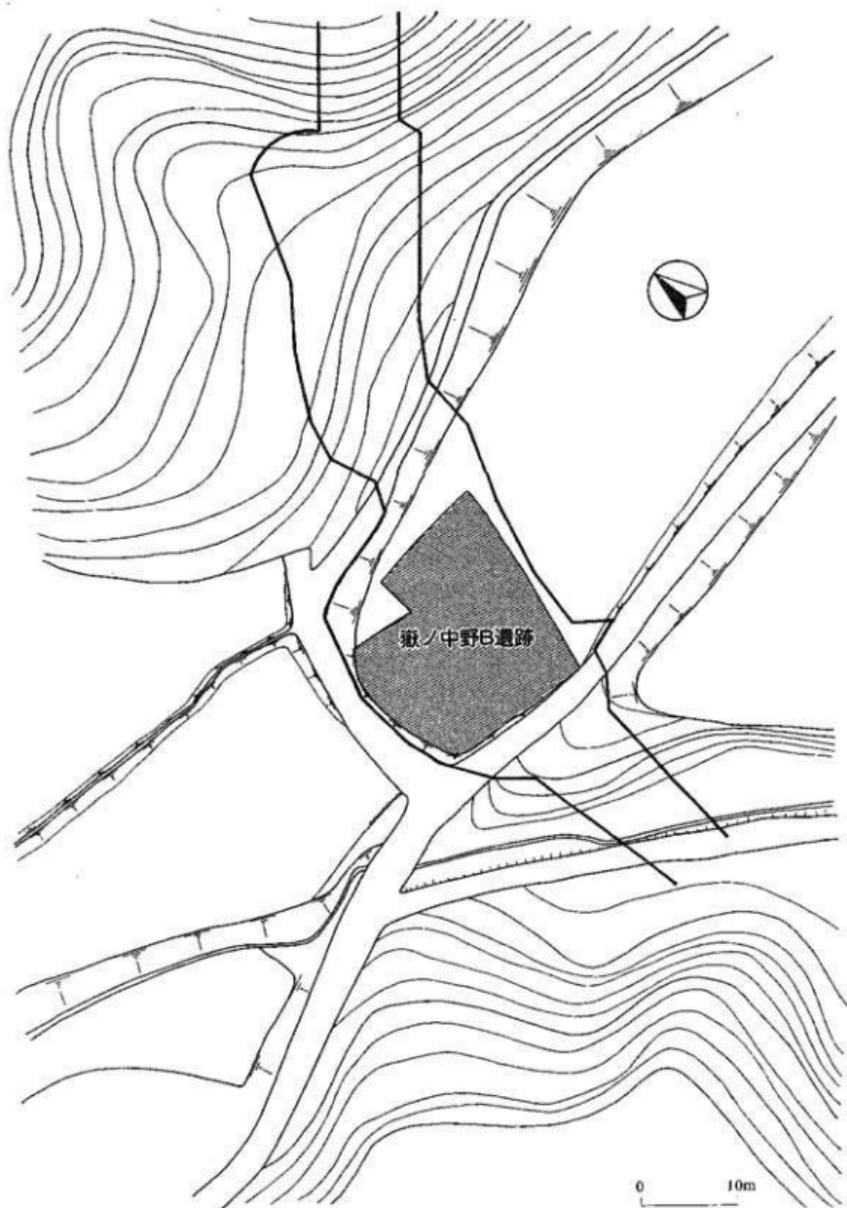
I層は、耕作土（赤褐色粘土層）である。この耕作土は、畑地造成のため、人為的に盛られたものである。地主の話によると、砂丘を若干水平に削平し、東方の耕土を垂線によって運搬し造成したものである。なお、分布調査時に確認された土器片は、この盛土の耕作土中に含まれていたものであり、東方の畑地から運ばれたものであることも判明した。

II層は、砂層である。砂層は、白灰色を呈し、層中には腐植土層などの発達は見られず、自然的現象によって一時的に堆積・形成されたものであることが理解される。

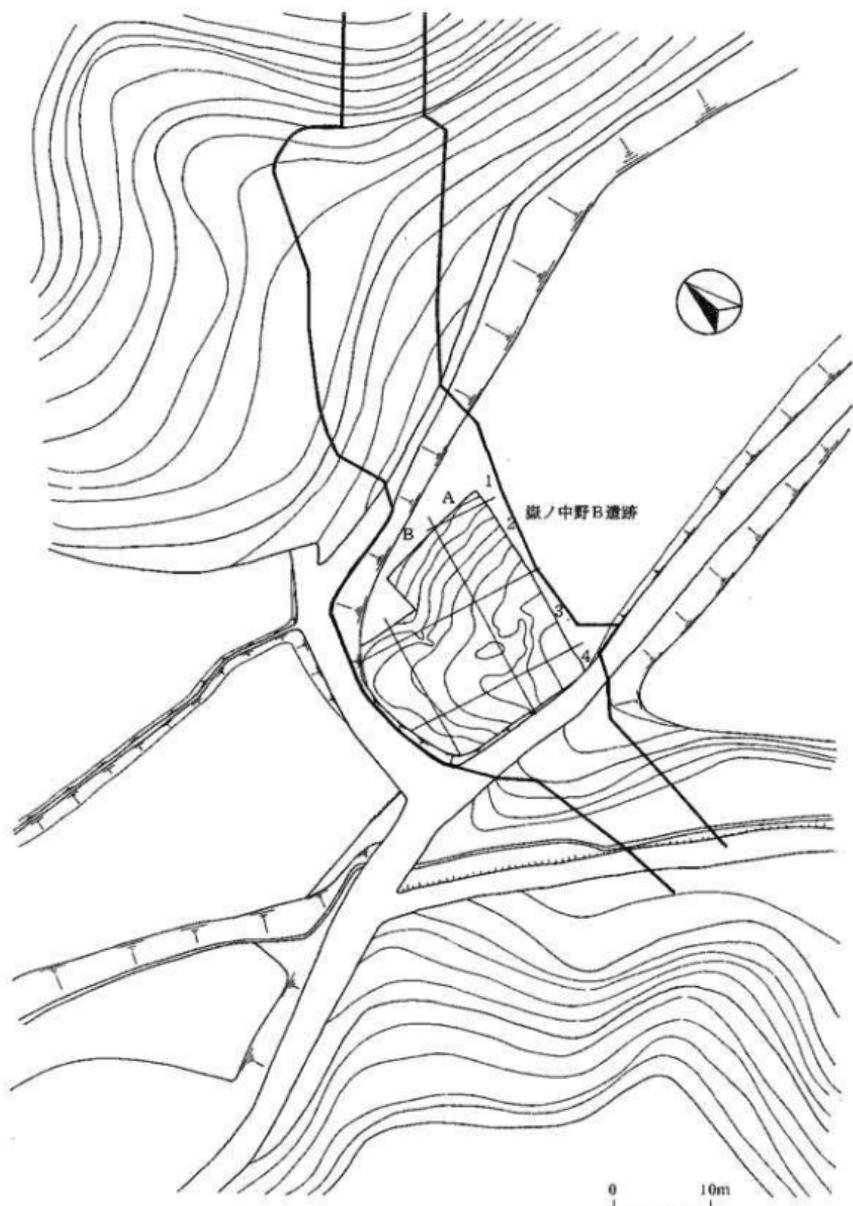
砂層は、第4図のように、南東方向のA3区付近は削平されており、北西方向の海岸方向に向って厚く堆積している。砂層の厚さは25cm～50cm程度を測る。また、畑地末端の西方には、防風用に除去した砂が幅4mで高さ2m程度の土壘状に盛土されている。

III層は、暗黒褐色から黒褐色土層を呈する。上層（III a層）は若干腐植化が進んだ暗黒褐色を呈し、本遺跡では遺物包含層となる。下層（III b層）は基本的にはIV層（明茶褐色土層）の腐植土層である。

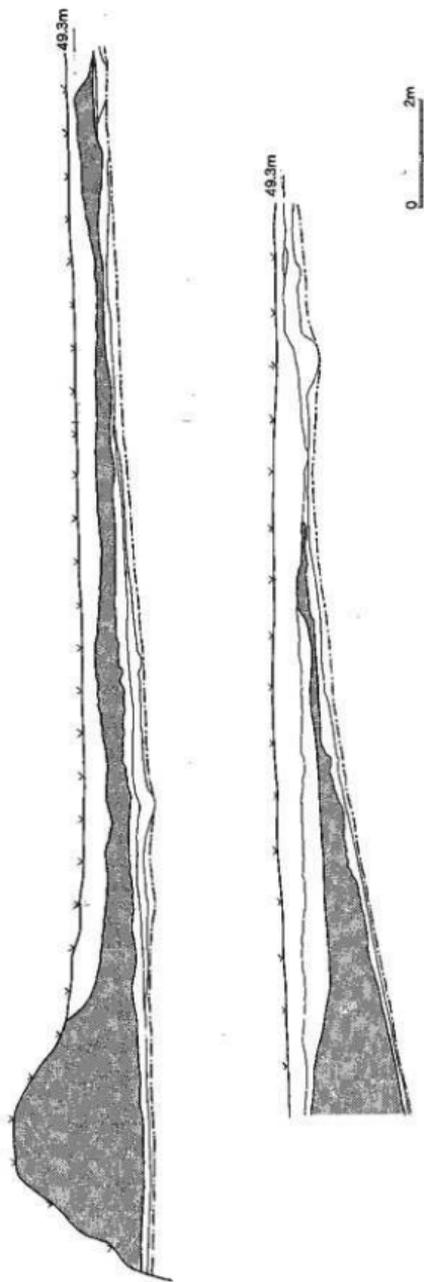
IV層は、明茶褐色を呈した粘質土層である。種子島特有の第三紀層を覆う土層である。



第2図 遺跡の範囲と周辺の地形



第3図 遺跡の地形と周辺の地形



第4図 嶽ノ中野B遺跡の断面図

### 第3節 III a層の調査

本遺跡の遺物包含層は、基盤層のIV層（明茶褐色粘質土層）の上部に形成されたIII層（黒褐色土層）の上層部分で、より腐植化の進んだIII a層（暗茶褐色土層）に存在した。

発掘調査は、このIII a層の遺物包含層の掘り下げと遺構検出を行う形で実施した。発掘調査の結果、III a層には弥生時代から古墳時代に位置付けられている薩南諸島独特の土器型式（上能野式土器と呼称されている）が出土し、遺構も確認されず、遺物包含層のみであった。出土遺物は単純型式が確認され、比較的短期間の遺跡の存立が想定されるものである。

発掘調査は、A～C区から2～4区の範囲内の約500㎡の調査面積である。出土遺物は、調査区のA-3区に集中して上能野式土器と呼ばれる土器片（約500点）の単独出土で石器もなく、その他には土師器の杯1個のみがみられるのみであった。

### 第4節 出土遺物

#### 1 出土土器 1（第7図-1～第12図-75）

III a層の包含層からの出土土器は、総数500点で実測可能な破片数は75点であった。出土土器は、脚台を持つ変形七器で胴部が張り、口縁部に向けそのまままっすぐ立ち上がる同一形態のものである。口縁部部は三角形に肥厚し、鋭いへら状の工具で文様を刻んでいる。文様は、胴部以上に描かれ、二本の平行線を基本として直線や曲線を描いている。胴部には細い粘土紐を縦位や横位に張り付けているものもみられる。底部は充実しているものの、やや上げ底になっているのが特徴である。

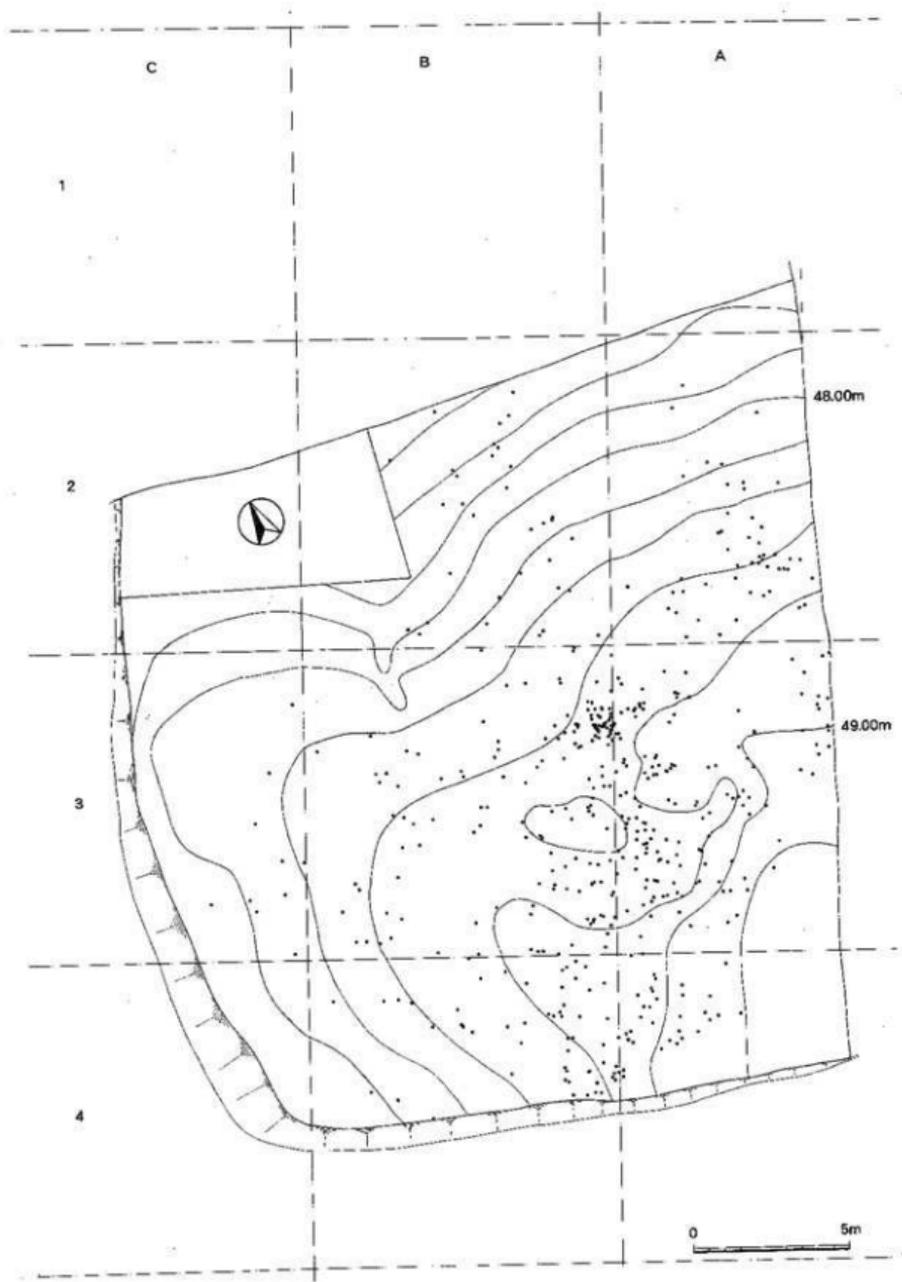
ほぼ同一型式に属することが考えられるが、文様等の形態から下記の①類～④類の4つに細分し、その他に⑤類として底部を取り扱った。

- ①類：口縁部に向けそのまままっすぐ立ち上がる形態で、口縁部の肥厚部分から胴部に鋭いへら状の工具で文様を刻むが、口縁部から胴部へ縦位に、胴部の頸部付近に横位に粘土紐を張り付けるタイプ（第7図-1～18）
- ②類：同一形態で、口縁部の肥厚部分から胴部に鋭いへら状の工具で文様を刻むもの（第8図-19～第9図-34）
- ③類：同一形態で、口縁部の肥厚部分だけに鋭いへら状の工具で文様を刻むもの（第10図-35～53）
- ④類：同一形態で、口縁部の肥厚部分から胴部にかけて無文のもの（第11図-54～61）
- ⑤類：同一形態の底（脚）部（第12図-62～75）

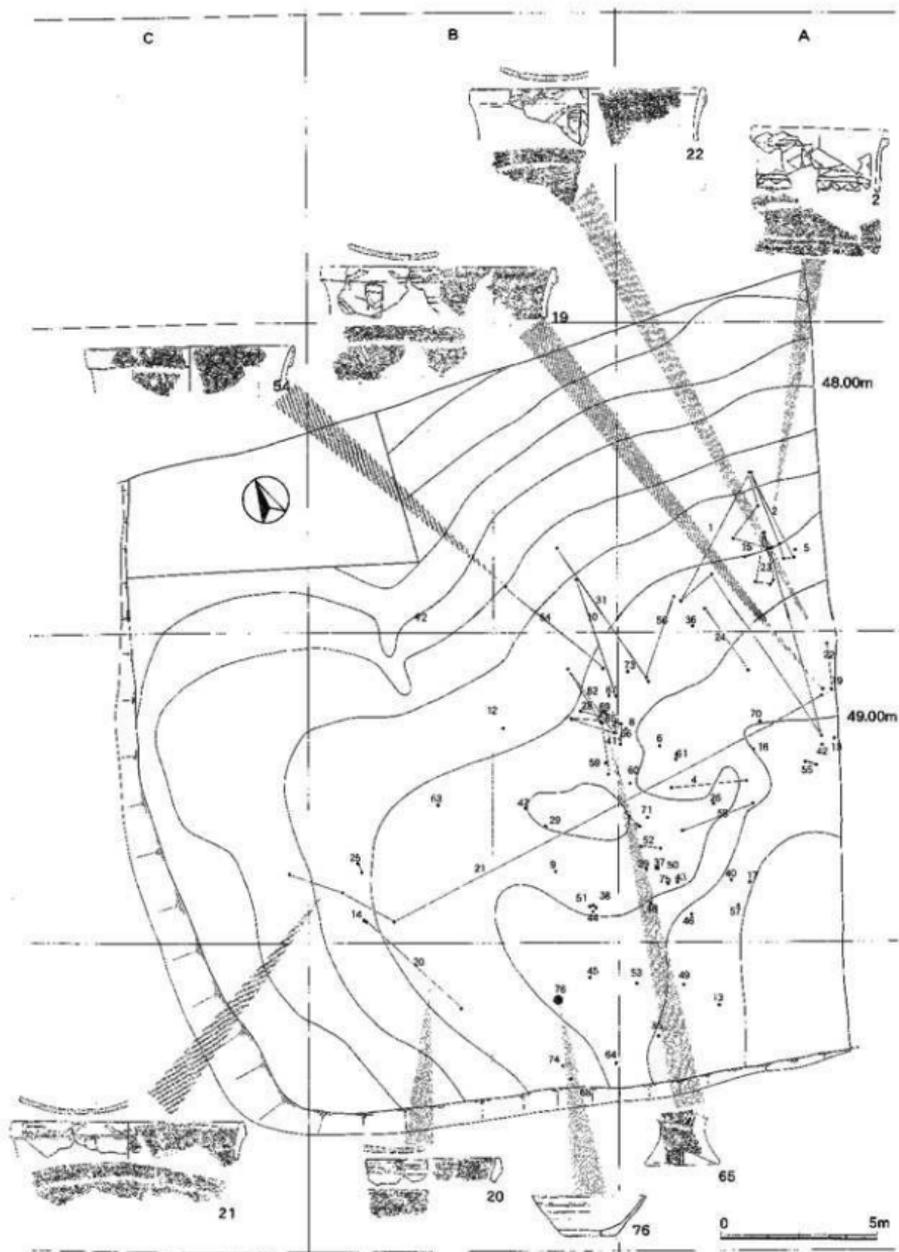
#### ①類土器（第7図-1～18）

全てIII a層からの出土である。色調は、全体に明るい赤褐色を呈し、部位によって黄褐色から暗褐色がみられる。焼成は非常に良好で、胎土には長石や雲母を混入している。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げるが、部分的にナデ調整の上からハケメで仕上げるものもある。

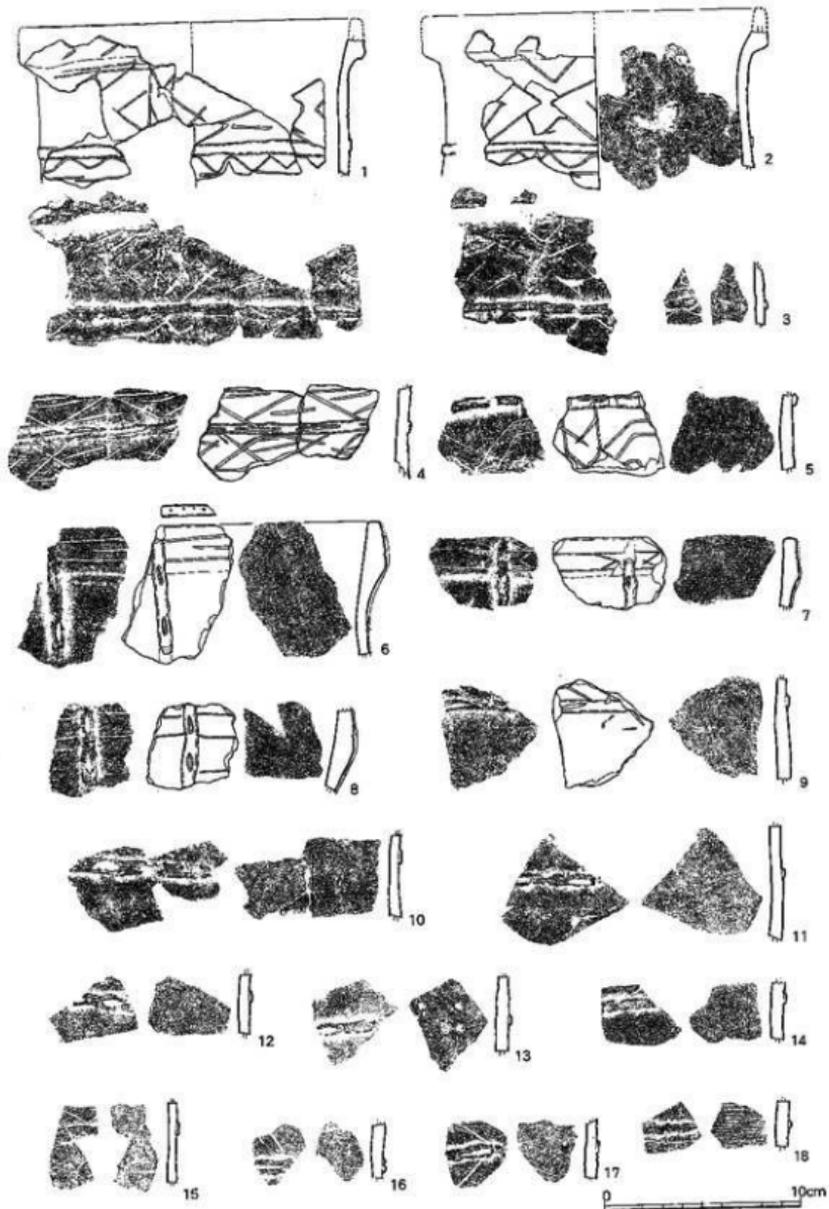
- 1, 2は胴部上半から口縁部にかけての破片である。口径約17cm、器厚5～6mmを測る。口



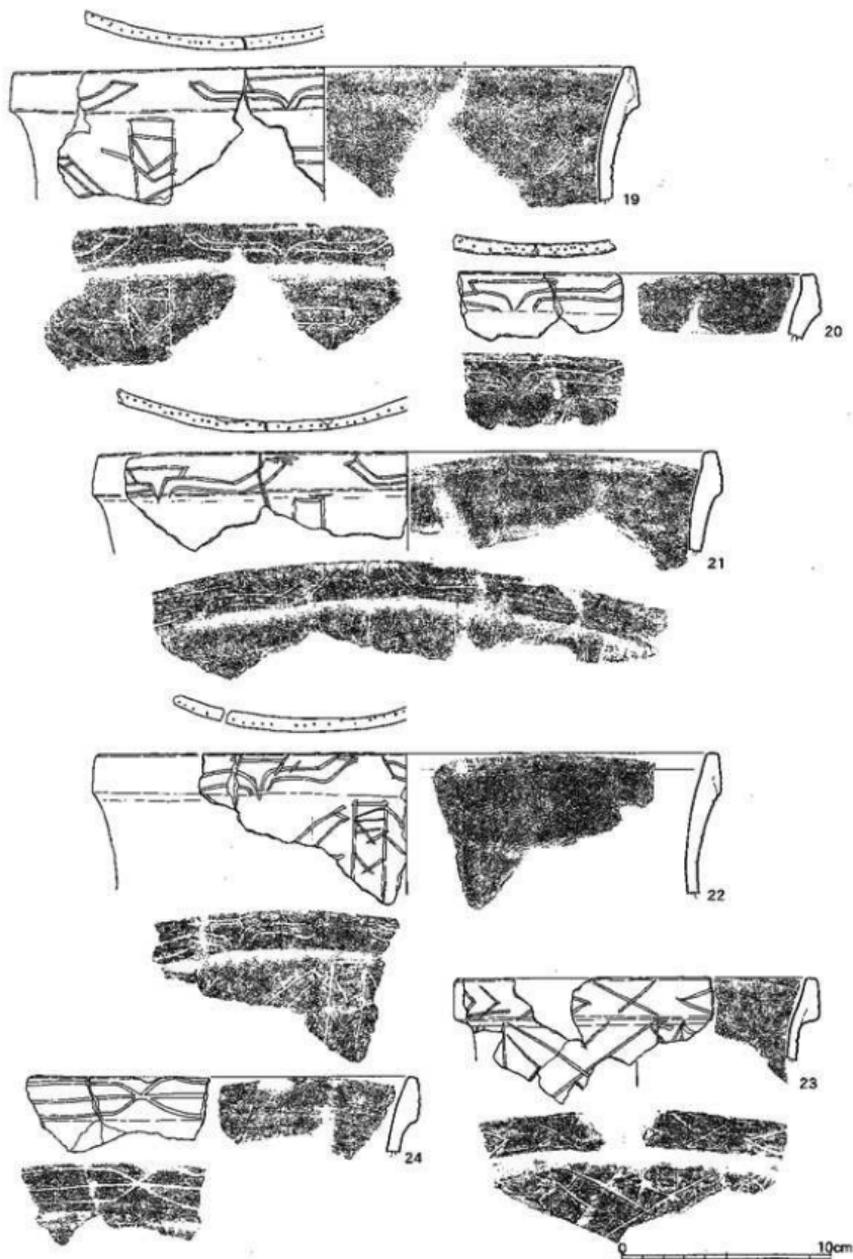
第5図 出土遺物分布図



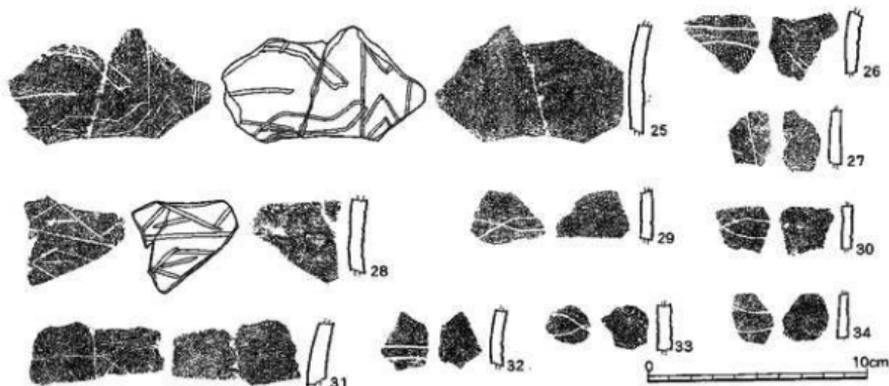
第6図 出土遺物分布図（接合状況）



第7図 出土遺物実測図(1)



第8図 出土遺物実測図(2)



第9図 出土遺物実測図(3)

縁部の肥厚部分から胴部に鋭いヘラ状の工具で文様を刻むが、口縁部から胴部へ縦位に、胴部の頸部付近に横位に粘土紐を張り付けている。粘土紐の上面には1~1.5cm間隔に、長さ1cm程度の長目の刺突文が施されている。6は、口縁部の肥厚部分上面の口唇部平坦面に串状の施文具による刺突文を施している。また、7のように刺突文のみられないものもある。

②類土器(第8図-19~第9図-34)

①類土器と同類で、出土層、色調、焼成、胎土及び内外面の調整も同様である。また、同じく口縁部の肥厚部分から胴部に鋭いヘラ状の工具で文様を刻むが、縦横の粘土紐を貼付しないタイプである。

19~22は、口縁部の肥厚部分上面の口唇部平坦面に串状の施文具による刺突文を施している。しかし、23・24のように刺突文のみられないものもある。25~34は、その胴部片である。

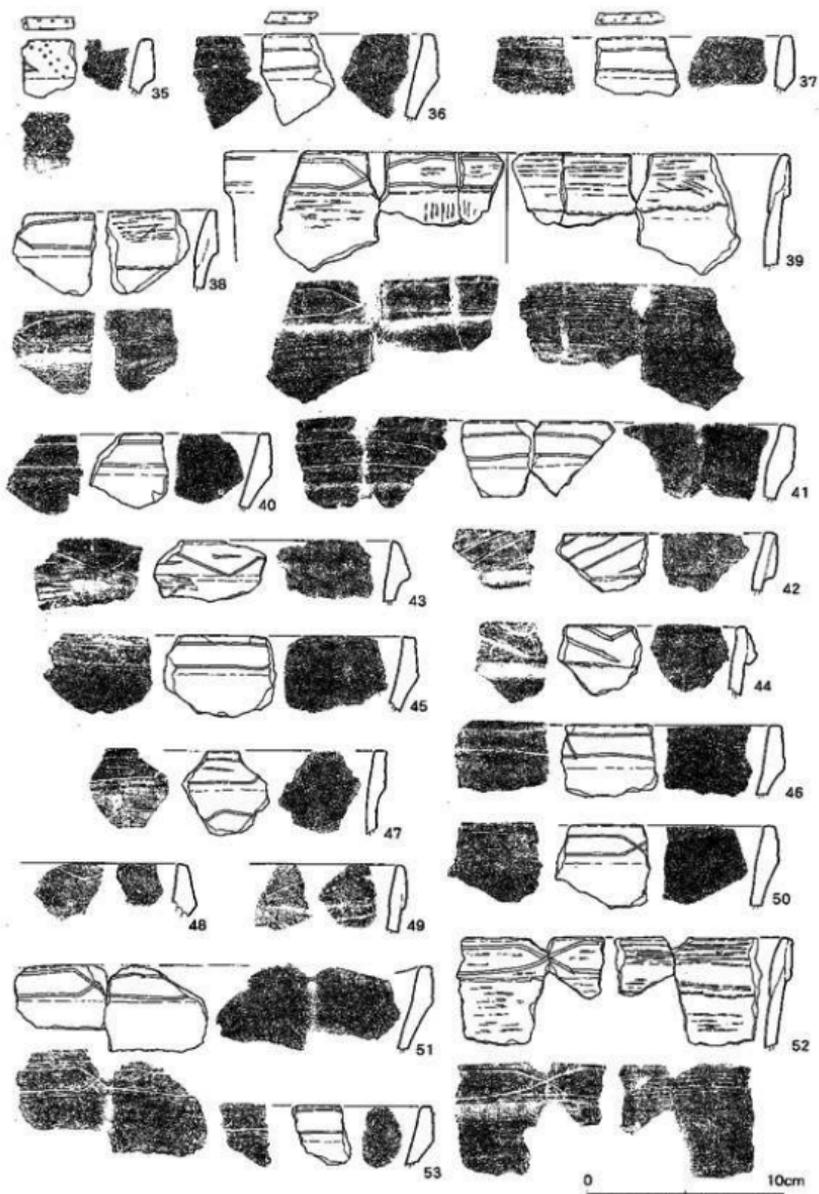
③類土器(第10図-35~53)

①類及び②類土器と同類で、出土層、色調、焼成、胎土及び内外面の調整も同様である。③類土器は口縁部の肥厚部分だけに文様を刻むタイプである。

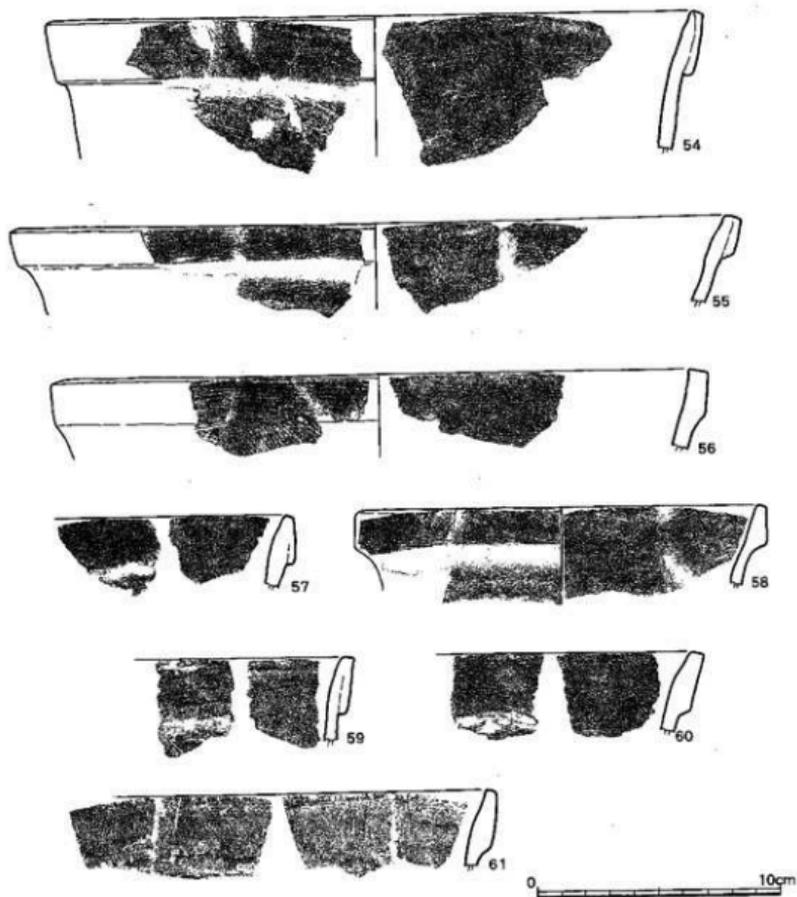
35は鋭いヘラ状の工具で描く文様に刺突文の文様が施されたものである。35~37は、11層部の肥厚部分上面の口唇部平坦面に串状の施文具による刺突文を施している。しかし、38~53のように刺突文のみられないものもある。

④類土器(第11図-54~61)

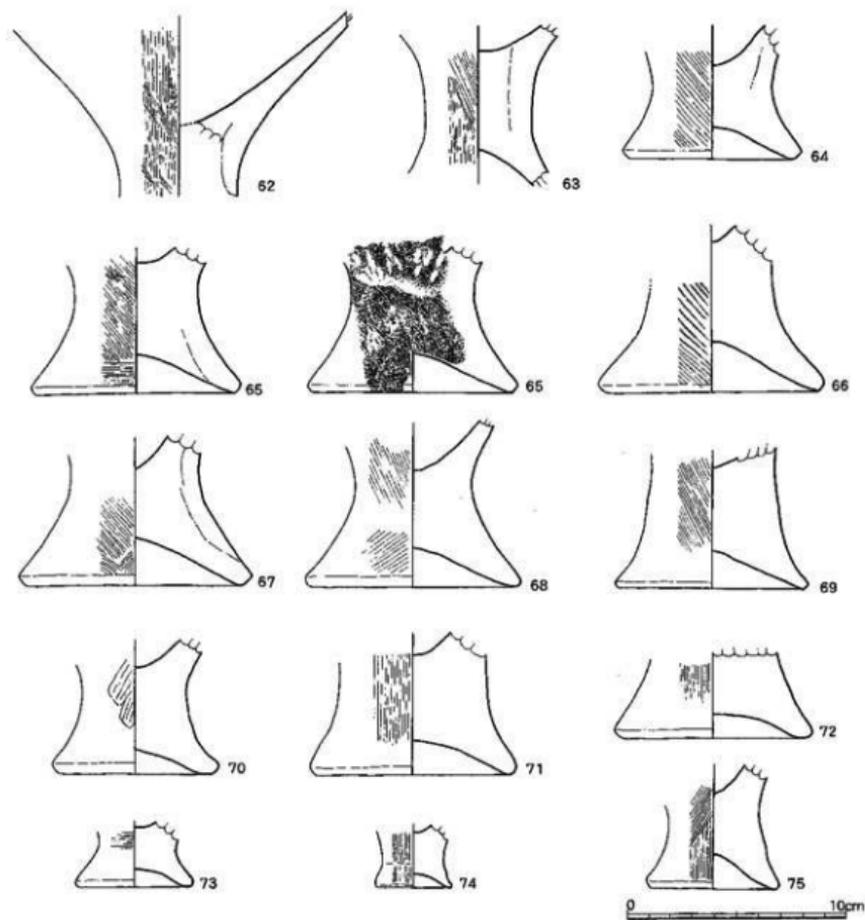
①類~③類土器と同類で、出土層、色調、焼成、胎土及び内外面の調整も同様であるが、口縁部の肥厚部分から胴部にかけて無文のものである。いずれも口縁部の肥厚部分上面の口唇部平坦面には、刺突文のみられないものである。



第10図 出土遺物実測図(4)



第11図 出土遺物実測図 (5)



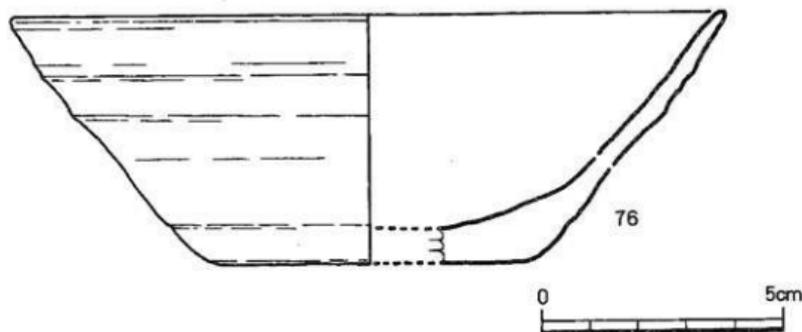
第12図 出土遺物実測図(6)

⑤類底部（第12図-62~75）

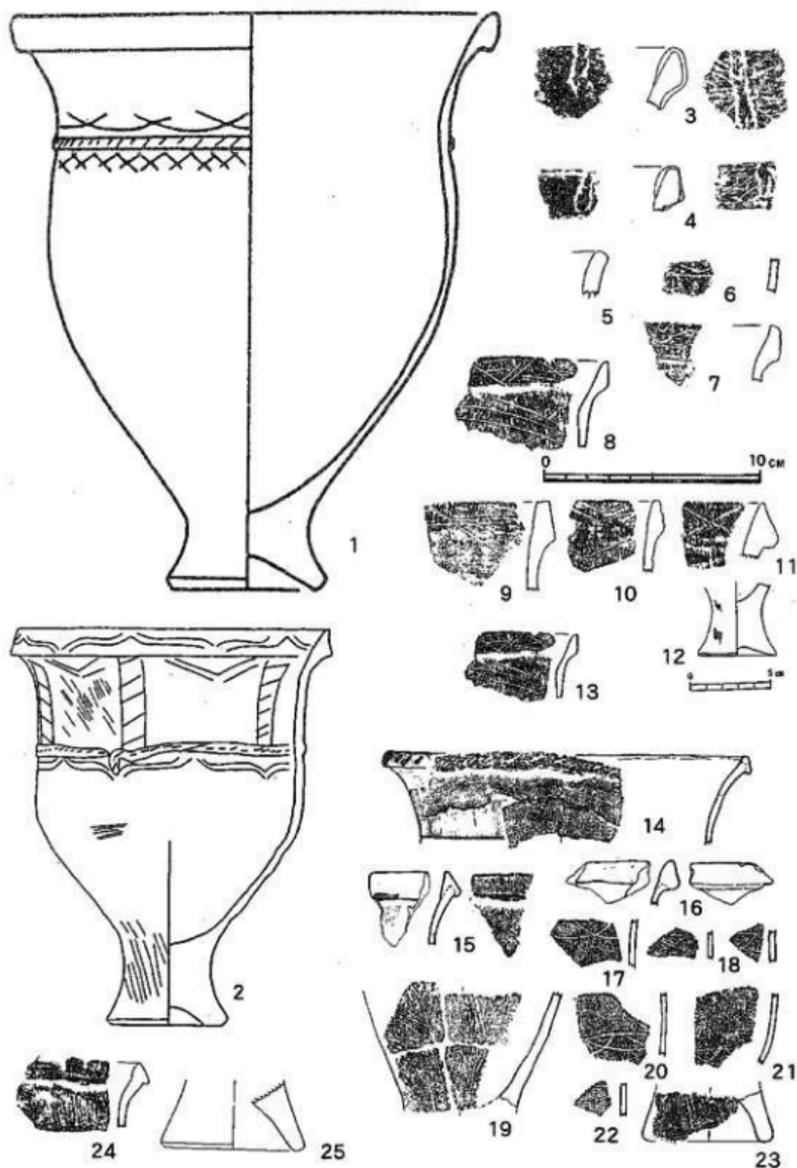
①類~④類土器の脚部と考えられるが、脚底径約10cmの大形のもの(66)から約3.5cmの小形のもの(74)がある。棒状の脚部を作り、胴部下半で接合するタイプである。65のように脚部の胴部下半との接合面に、刺突状の刻目を施すものもある。脚部はすべて上げ底である。

2 出土土器2（第13図-76）

土師器の杯である。A-4区の包含層（Ⅲa層）が削平されている部分から、一個体分が出土した。回転台を使用して成形し、ストレートな体部をもつ。底部は回転ヘラ切りである。法量（復元）は、口径14.8cm、器高5.2cm、底径7.2cmである。精良土を用い、乳褐色を呈する。極めてしろい。



第13図 出土遺物実測図（7）



第14图 上能野式土器实测图

第3表 嶽ノ中野B遺跡出土土器一覽表(1)

押印	番号	出土区	層	色調	焼成	胎土	外面文様調整	内面文様調整
第7 回	1	A 2	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	2	A 2	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	3	A 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	4	A 3	Ⅲ a	黄褐色	良好	雲母	ナデ	ナデ
	5	A 2	Ⅲ a	黄褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	6	A 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	7	△ 2・△ 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	8	A 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	9	B 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	10	B 2・B 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	11	A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	12	B 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	13	A 4	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ハケメ	ハケメ
	14	△ 2	Ⅲ a	赤褐色	良好	雲母	ナデ	ナデ
	15	A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	16	A 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	17	A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
	18	A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ
第8 回	19	A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	20	B 3・B 4	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	21	A 3・B 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	22	A 2・A 3	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	23	A 2	Ⅲ a	暗赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	24	A 2・A 3	Ⅲ a	明褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
第9 回	25	B 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	26	△ 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・石英	ナデ+ハケメ	ハケメ
	27	A 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	石英・雲母	ナデ	ナデ
	28	B 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	石英・雲母	ナデ	ナデ
	29	B 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	30	A 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	31	△ 3・B 2	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ
	32	B 4	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	33	B 4	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	34	B 3	Ⅲ a	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
第10 回	35	A 4	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
	36	A 2	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ
	37	A 3	Ⅲ a	赤褐色	良好	長石・石英	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ

第4表 嶽ノ中野B遺跡出土土器一覽表(2)

神田	番号	出土区	層	色 調	焼 成	胎 土	外面文様調整	内面文様調整	
第10	38	B3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	39	A3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	40	A3	Ⅲa	黄褐色	良好	長石	ナデ	ナデ	
	41	B3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	42	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	43	A3・B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	44	B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	45	B4	Ⅲa	黄褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	46	A3	Ⅲa	明褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	48	B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	49	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	50	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石	ナデ	ナデ	
	51	B3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石	ナデ	ナデ	
第11	52	A3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	53	A4	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・石英	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	54	B2・B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・石英	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	55	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	56	A2・A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	57	A3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	58	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	59	B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	60	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	61	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
	第12	62	B3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石	ハケメ	ハケメ
		63	B3	Ⅲa	黄褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
		64	B4	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ
65		B3	Ⅲa	明褐色	良好	長石・石英	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	
66		A3・B3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ	
67		B3	Ⅲa	黄褐色	良好	長石	ナデ	ナデ	
68		B4	Ⅲa	黄褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ	
69		B3	Ⅲa	黄褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ	
70		A3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
71		A3	Ⅲa	暗褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
72		B2	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
73		A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ	ナデ	
74		B4	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ	
75	A3	Ⅲa	赤褐色	良好	長石・雲母	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ		

## 第Ⅳ章 発掘調査のまとめ

嶽ノ中野B遺跡の発掘調査では、弥生時代から古墳時代に該当する時期の薩南諸島独特の土器型式が、単純層として発見された。遺構を伴わないで遺物包含層のみであったが、出土遺物は単純土器型式が確認され、比較的短期間の遺跡の存立が想定される。他に、一個体の土師器の杯が出土したが、これは「Ⅱ層の新时期砂丘より新しいものであり、Ⅲa層出土の土器型式とは明らかに時期を異にするものである。

嶽ノ中野B遺跡から出土した土器は、本遺跡に近い上能野貝塚で、昭和47年に河口貞徳氏等によって発掘された土器をもとに、型式設定された上能野式土器に該当するものである。「上能野貝塚発掘概報」では、弥生時代後期の土器とされ、現在のところその出土は、種子島・屋久島のみに限られているようである。しかし島内でも出土例は少なく、本遺跡の発見はその良好な資料の一つと考えられる。

本遺跡出土の上能野式土器の特徴をあげると、断面三角形の口縁部の口唇部に僅かな平坦面を作るものがあることと、文様を施さない無文のものが存在するところである。上能野式土器の標式遺跡である上能野貝塚の発掘調査の報告によれば、「…この土器は中形の釣鐘形で、充実した脚台をもっている。底部中心部がわずかに凹みあげ底風になっているのが特徴である。…文様はするどい篋によって胴部以上に描かれ、直線と曲線を組み合わせた特色のあるもので、二並行線を基本文様として、山形又はその変形で構成され、間に二並行線間を斜線で充めたものである。口縁部外面と頸部には粘十紙をめぐらし、口縁部は肥厚して断面は三角形を呈する。…」と上能野式土器を述べている。この型式概念には明記されていないが、上能野貝塚の報告(第14図)にも口唇部平坦面をもつもの(第14図-9・10)や無文のもの(第14図-15)が確認され、これらのバリエーションが加わることが明らかとなった。

時期については弥生時代後期とされていたものの、最近では古墳時代にまで下るのではないかという見方もあった。今回は上能野式土器を含む包含層から採取した炭化物による、年代測定を試みており、その結果が1880±120年前(1950年を基準として)が得られたのは興味深い。土壌からのサンプルであるところから問題も多いが時期設定の一助となると考えられる。

また本遺跡でⅡ層の白色砂層はそれ以降の堆積であることが明らかになり、種子島における新时期砂丘の形成に関する貴重な資料となった。

さらに遺跡の範囲は、今回発掘した区域から山手のほうには広がっていると考えられ、生活遺構等の発見は今後に期待したい。

単独で出土した土師器の杯については、種子島では南種子町松原遺跡出土資料に類似形態がみられるが、胎土・色調が異なる。9世紀後半頃に位置付けられる。

### 引用文献

河口貞徳 1973 「上能野貝塚発掘概報」 鹿児島考古 第7号

# 写真図版



1. 獄ノ中野B遺跡遠景(東カ5)



2. 獄ノ中野B遺跡遠景(北カ5)



3. C3区~A3区南側壁断面



4. A2区西側壁断面



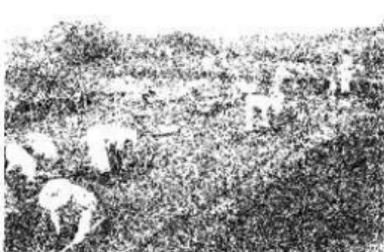
5. A4区~A1区西側壁断面



6. 調査風景(B2区付近)



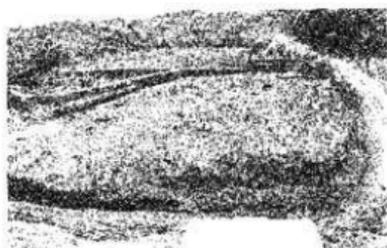
7. 調査風景(A2区~B2区付近)



8. 調査風景(A3区~B3区付近)



1. 調査風景 (A2区~B2区付近)



2. A3区~B3区完掘状況



3. 全景 (完掘状況)



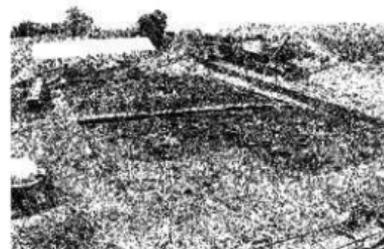
4. 土器出土状況



5. 調査風景 (B3区付近)



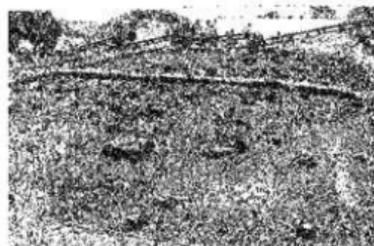
6. 調査風景 (A3区~B3区)



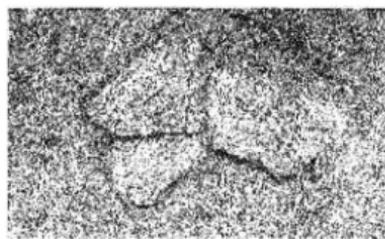
7. 遺物出土状況 (A3区~B3区)



8. 遺物出土状況 (A3区~B3区)



1. 遺物出土状況 (A3区~B3区)



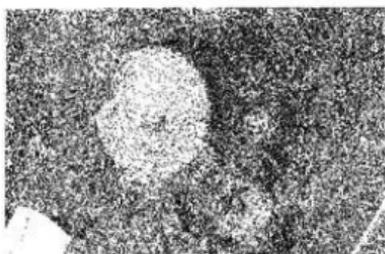
2. 土器出土状況



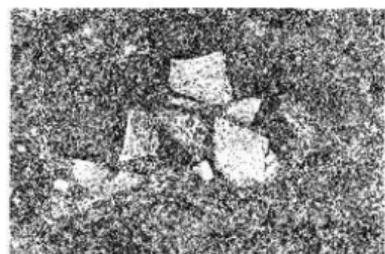
3. 全景 (完掘状況)



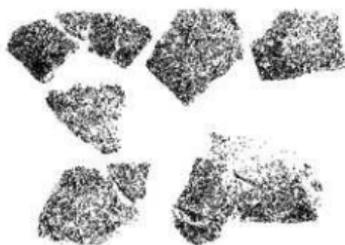
4. 土器出土状況



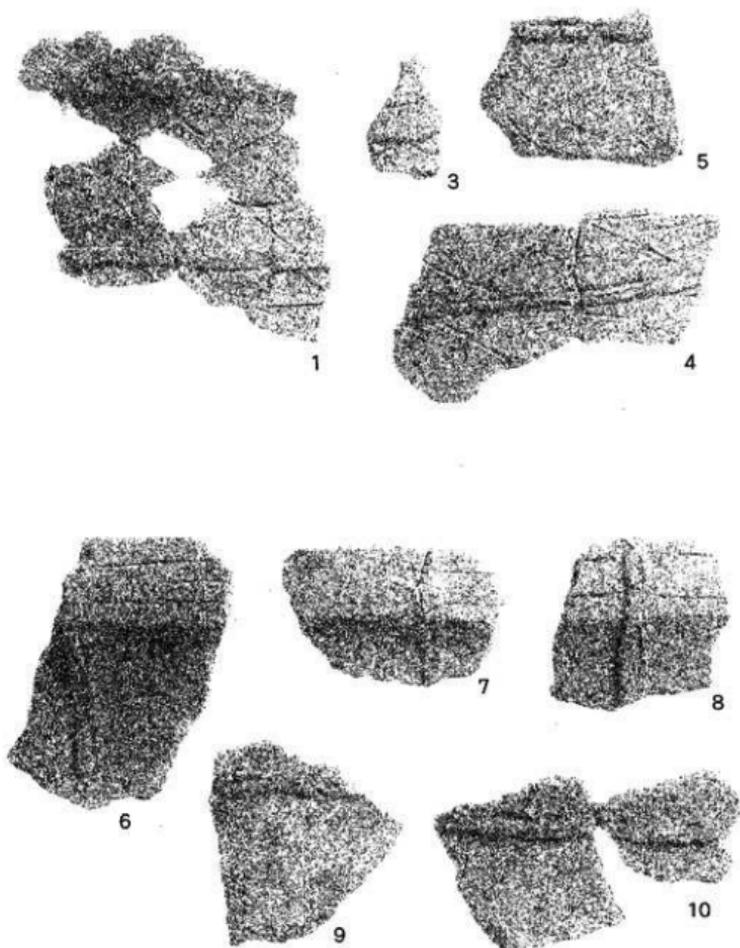
5. 土器出土状況 (底部)



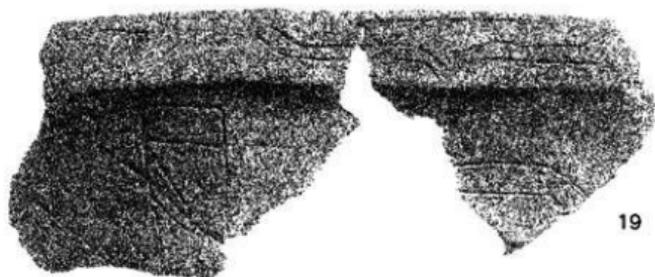
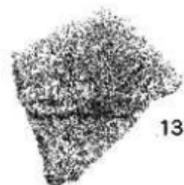
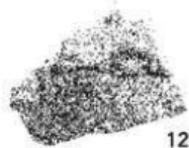
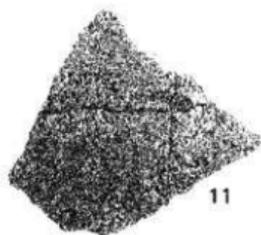
6. 土器出土状況 (土師器)



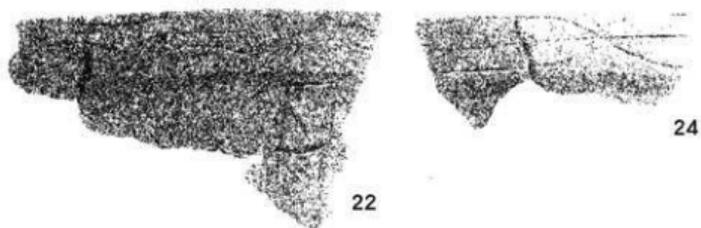
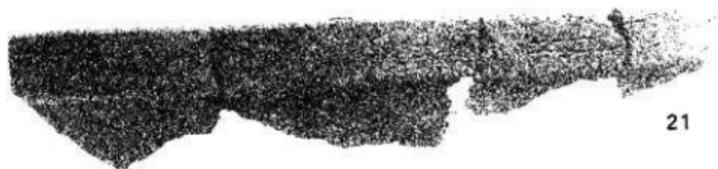
7. 出土土器 (土師器)



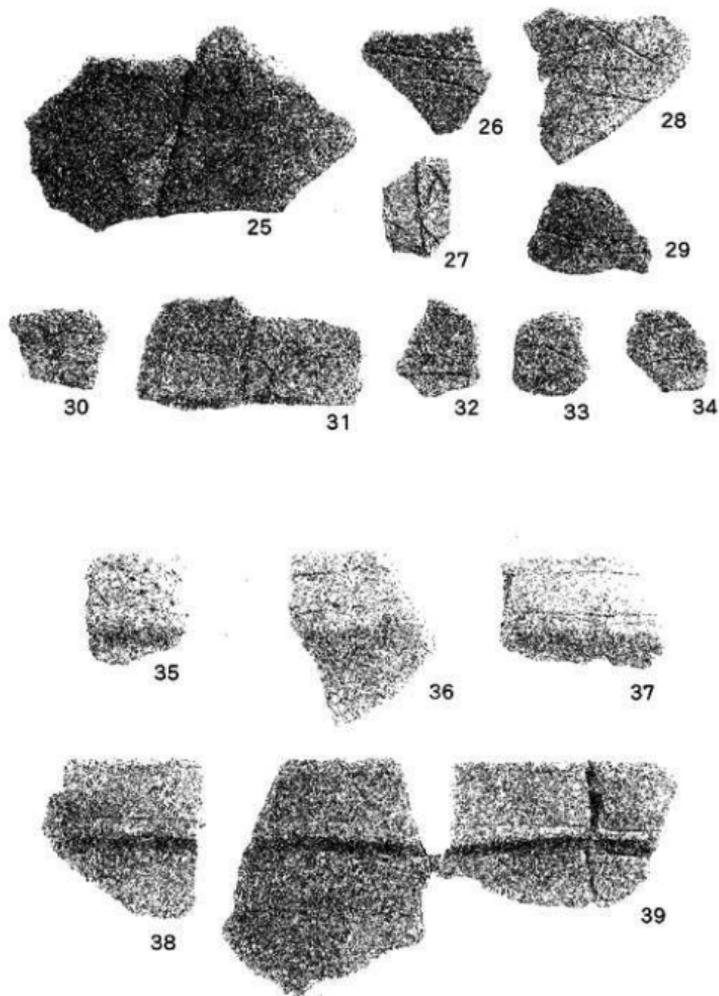
出土土器



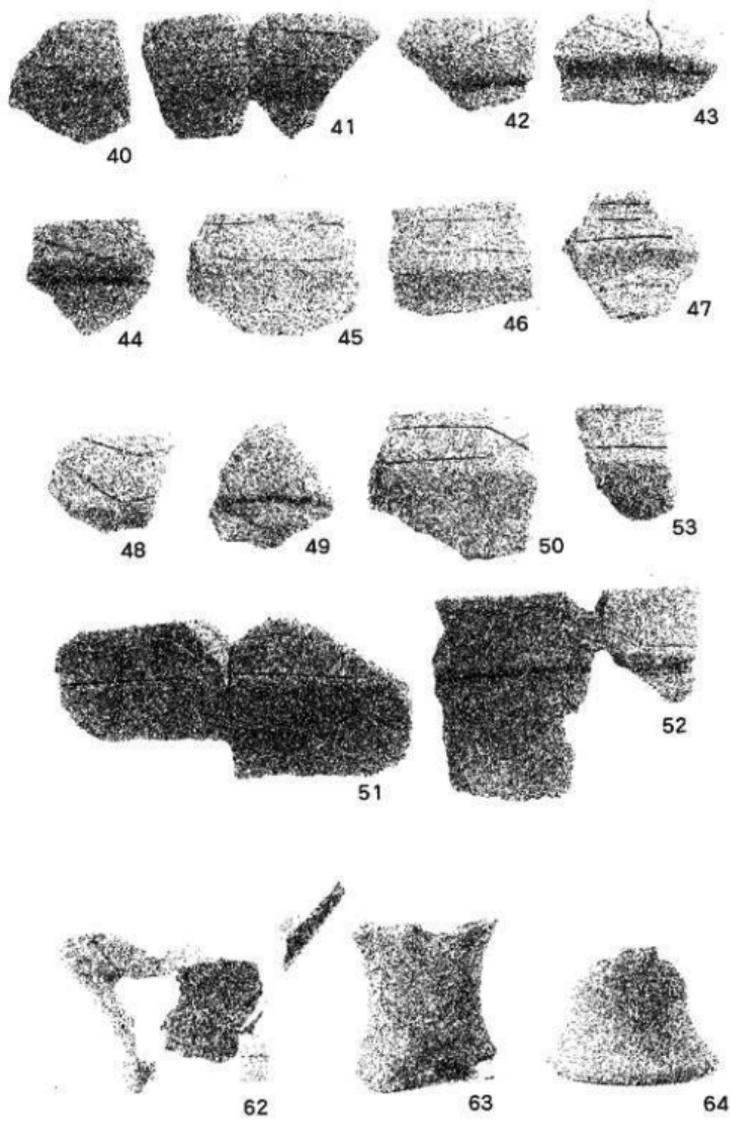
出土土器



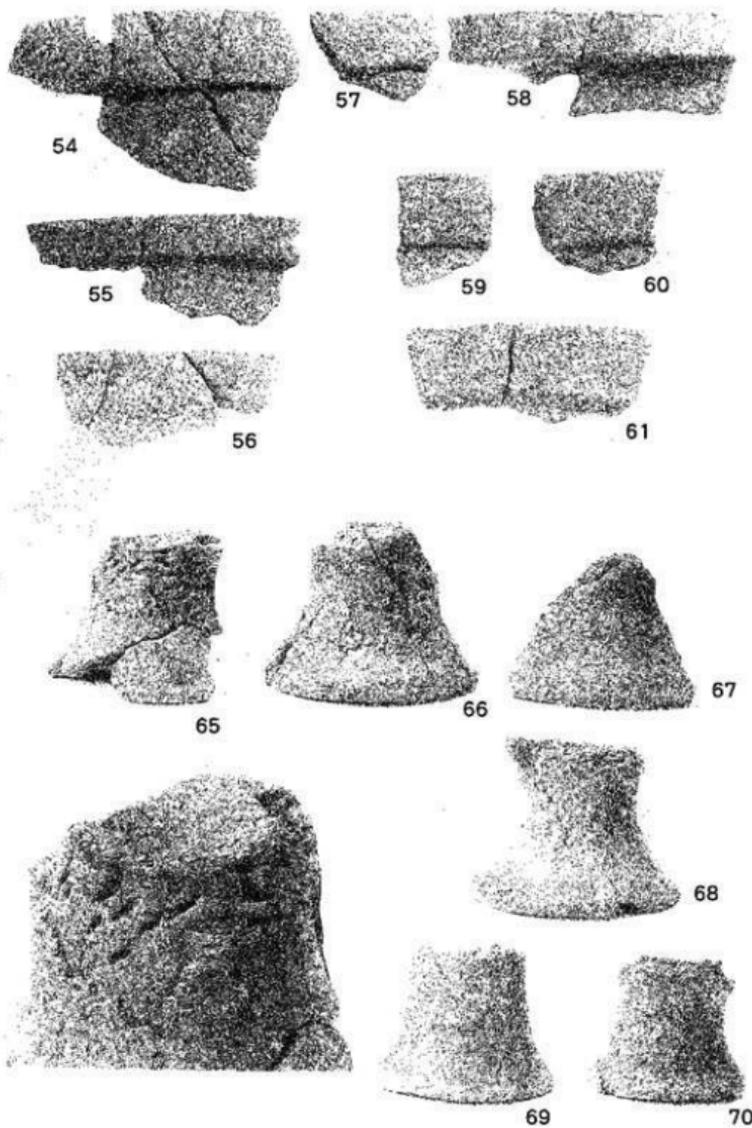
出土土器



出土土器

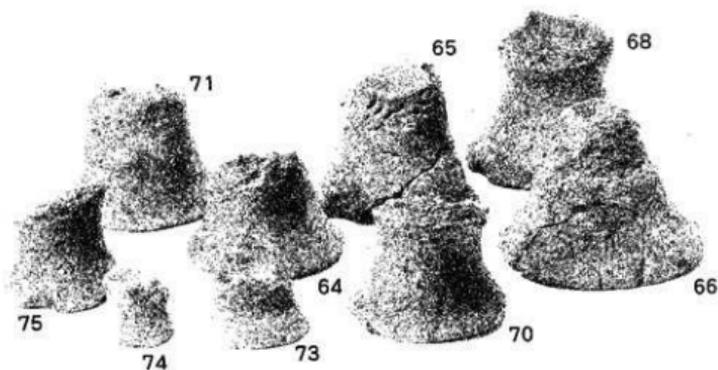
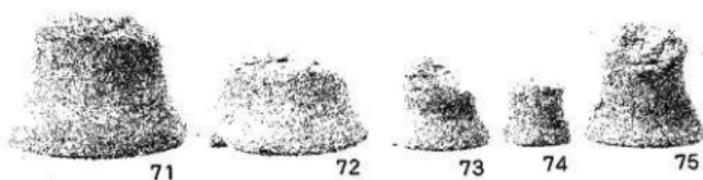


出土土器



出土土器

図版  
10



出土土器

### はじめに

種子島西部の沿岸部には熊野から竹之川にかけて幅約200mの砂丘が発達しており、その南部に今回調査が行われた獄ノ中野遺跡が位置する。本遺跡では、発掘調査により、砂丘を構成する新期砂丘砂下位の粘土層から4～5世紀の遺物が出土している。今回の分析調査では、この粘土層の堆積時期および当時の古環境、とりわけ古植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定と花粉分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、調査区内で新期砂丘砂直下の粘土層より採取された土壌試料1点である。試料岩質は褐色の砂質シルトからなる。

### 2. 放射性炭素 (C<sup>14</sup>) 年代測定

#### (1) 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。なお、半減期はLIBBYの半減期5570年を使用した。

#### (2) 結果

測定結果は、 $1880 \pm 120 \text{yBP}$ : A.D.70年 (Gak-18196)であった。

粘土層中の遺物の時代性が4～5世紀であることから、放射性炭素年代測定値の方がやや古い値を示していることになる。堆積物の放射性炭素年代測定では、その中に普遍的に含まれているフミン質有機物を測定対象とするが、古い地層から供給されたフミン質有機物が混じれば堆積年代より古い値を与えることになる(中井ほか, 1988)。ここでの粘土層の成因については不明であるが、地形的にみてその可能性は充分考えられる。そうだとすれば今回の結果は概ね調和的とみなせる。今後は粘土層中に含まれる材や未分解植物遺体、貝などの化石について測定し、今回の結果と比較することが必要であろう。

また、本粘土層の堆積時期を推定することは、本地域の地形発達史および遺跡の立地環境を考える上で重要である。日本各地の海岸砂丘では、縄文海進の頂期ないしそれ以前の時期の沖積世に形成された「旧砂丘」の上部に縄文海進後の小海退期に対応する砂丘固定期発達した腐植質堆積物(旧期クロスナ層)が堆積し、本層は古墳時代以降に形成される「新砂丘」によって覆われる(井岡, 1975)。本遺跡で認められた粘土層も「旧期クロスナ層」に対比される可能性があり、地域的な検討を行う上でもその成因について検討することが必要である。

### 3. 花粉分析

#### (1) 方法

湿重約 10g の試料について、水酸化カリウム (10% KOH) 処理、重液分離 (臭化亜鉛、比重 2.2)、フッ化水素 (HF) 処理、アセトリシス処理 (無水酢酸:濃硫酸=9:1) の順に物理・化学的な処理を施して、試料から花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類の同定・計数を行う。

#### (1) 結果

分析試料からは花粉化石は全く検出されず、保存状態の悪い種類不明のシダ類胞子が 45 個体検出された。このような産状と、シダ類胞子が広葉樹に由来する花粉に比較して、風化に対する抵抗性が強いこと (中村, 1967) から、堆積物中には花粉が堆積しなかったのではなく、堆積後に何らかの風化作用の影響により分解・消失したと考えるのが妥当である。いずれにしても、今回の結果からは粘土層堆積期の遺跡周辺の古植生を推定することは困難である。

ところで、今回のように花粉化石が残存し難い堆積物でも、珪藻化石や植物珪酸体は良好に保存されている場合が多い。これは植物珪酸体・珪藻化石がともに無機物 (珪酸) からなることに起因する。また、花粉化石と同様に大量に堆積物中に取り込まれ、形態的特徴による種類分けが可能であるという特徴をもつ。この特徴から古環境復元における有効な方法とされており、今後は、本堆積物について珪藻分析や植物珪酸体分析を実施し、堆積環境や古植生に関する検討を行うことが期待される。

#### 引用文献

- 中井信之・中村俊夫 (1988) 放射性炭素年代測定法, 地質学論集 29, P235-252  
中和 純 (1967) 花粉分析 P232, 古今書院  
井関弘太郎 (1975) 砂丘形成期分類のためのインデックス, 第四紀研究 14, P183-188



発掘調査に携わった方々

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

## 嶽ノ中野B遺跡

1995年3月

発行 鹿兒島県西之表市教育委員会  
鹿兒島県西之表市西之表7612番地